

The Whisper from Amherst

～エミリオのささやき～

エミリオは生前、1789篇の詩とともに、多くの手紙を書きました。投函されたのもあれば、いまだにだれに送るつもりで書いたのか想像するしかない手紙もあります。自宅にひきこもった生活の中で、手紙は人とつながりをもつ大切な手段でした。自分が悲しいときは自分の悲しみを、人が辛いときはなぐさめの気持ちを、手紙を通して伝えました。

1863年から1874年の10年間の間に、エミリオはいくつかの悲しい出来事に見舞われました。

1864年から1865年にかけて家族と愛犬カーロから離れ、ボストンのいとこ、ノークロス姉妹のところに身を寄せながら、目の治療を受けました。エミリオの人生と仕事の上で中心的人物であった詩人および随筆家^{トーマス ウェントワース ヒギンソン} Thomas Wentworth Higginsonが南北戦争に参加し、負傷しました。1866年、愛犬カーロを亡くしました。1874年には最愛の父親を亡くしました。その間に書いた作品の1つがこの詩です。

イフ アイ キャン ストッ プ ワン ハートウ フロム ブレイキング
 ‘If I can stop one Heart from breaking’

If I can stop one heart from breaking, 1つの心が壊れるのをとめられるなら

アイ シャル ノットウ リヴ イン ヴェイン
 I shall not live in vain;

わたしの人生だって無駄ではないだろう

イフ アイ キャン イーズ ワン ライフ ディ エイキング
 If I can ease one life the aching,

1つのいのちの痛みを癒せるなら

オーア クール ワン ペイン
 Or cool one pain,

1つの苦しみを静められるなら

オーア ヘルプ ワン フェインディング ウロビン
 Or help one fainting robin

1羽の弱ったコマツグミを

アントウ ヒズ ネストウ ア ゲン
 Unto his nest again,

もう1度、巣にもどしてやれるなら

アイ シャル ナットウ リヴ イン ヴェイン
I shall not live in vain.

わたしの人生だって無駄ではないだろう

(みすず書房「エミリー・ディキンソン家のネズミ」長田 弘 訳)

エミリーはこの頃、すでに隠遁生活に入っていました。でもこの詩を読む限り、信仰告白ができずに教会や世間から遠ざからざるをえなかった心の葛藤があるにも関わらず、いろいろな物や人と関わりたい、できれば役に立ちたいという気持ちが伝わってきます。

エミリーの詩は難解だと思われがちですが、この詩はエミリーの優しく素直な性格が表れていて、金ヶ崎町の行事「たくましいかねがさきっ子推進大会」のオープニングセレモニーで小学校6年生の子どもが、可憐に朗読してくれました。

各行の単語の語尾のアルファベットを見ると、たてにきれいに韻が踏んであります。gngn nnn、音でいえば、グ・ン・グ・ン　ン・ン・ン。このような詩は音読するととても気持ちがいいものです。ヒップホップ調にリズムをつけて読んでみてはいかがでしょうか。

Nellie's Mom



絵本「エミリーとカルロ」



駒鳥(コマツグミ)



エミリーの父エドワード・ディキンソン